

## 18 ロービジョンクリニックでの盲ろう児・者に対する支援の現状と課題

1)病院 リハビリテーション部ロービジョン訓練 2) 病院 第二診療部

山田 明子<sup>1)</sup> 尾本 周<sup>2)</sup> 仲泊 聡<sup>2)</sup>

西田 朋美<sup>2)</sup> 三輪 まり枝<sup>1)</sup> 西脇 友紀<sup>1)</sup>

【目的】ロービジョンクリニックは、見えにくさに対するケアを行う場であるが、見えにくさを訴える患者の中には聴覚障害を併せもつ患者が受診することもあり、重複障害に対してどのように支援したらよいかという支援のあり方が問題となる。そこで、当クリニックに過去3年間に受診した視覚障害および聴覚障害を併せもつ者についてどのような支援が行われたか検討するとともに、今後の支援のあり方について検討を行った。

【対象と方法】平成19年4月から平成21年3月までに当院ロービジョンクリニックで視能訓練士が担当するロービジョンケアを受けた患者544名の中で、視覚障害および聴覚障害を併せもつ13名(9~90歳、平均52.1歳)について、僚眼の視力、視野、盲ろう者の障害の程度、眼疾患名、コミュニケーション手段、ケア内容、特有なニーズについて検討を行った。

### 【結果】

- 1) 僚眼の視力：0.01以下が1名、0.02~0.04が3名、0.05~0.08が1名、0.09~0.2が5名、0.3~0.4が1名、0.7が2名であった。
- 2) 視野：求心性狭窄5名、中心暗点3名、その他視野異常5名であった。
- 3) 盲ろう者の障害の程度：弱視ろう2名、弱視難聴11名であった。
- 4) 眼疾患名：網膜色素変性症4名、緑内障2名、黄斑変性症2名、視神経萎縮2名、ピアソン症候群1名、糖尿病網膜症1名、先天眼異常1名であった。
- 5) コミュニケーション手段：大きな声での会話11名、口話法1名、手書き文字1名であった。
- 6) ケア内容：近方視39%、遠方視3%、拡大読書器28%、偏心視訓練2%、遮光眼鏡20%、その他訓練8%であった。
- 7) 特有なニーズ：視機能、聴力低下に伴う学習環境について教育相談を行った例 1例  
視機能低下時のコミュニケーション手段について相談を行った例 1例

### 【考察】

ロービジョンクリニックでケアをした13名のうち11名は、弱視難聴と呼ばれる視覚障害および聴覚障害の程度が比較的軽度なもので、拡大読書器などの視覚補助具を用いて文字等を拡大することにより、視覚からの情報獲得が可能であった。このような障害程度が軽度なケースに対しては情報獲得を目的とした視覚的な支援の重要性が示唆された。

また、少数例ではあるが、特有なニーズの例にあげたように、疾患の進行による視機能低下や聴力低下に伴うコミュニケーション手段の変更や学習環境の整備に対する支援などが必要なケースもあり、疾患の進行状況に合わせた支援の重要性が示唆された。